

蓬萊町だより

第八十四号

平成 26 年 1 月 25 日

発行 蓬萊町会

町内探訪 (10)

勝林寺のこと その五

本城康至

前号までは、「しよりん寺」が天正十九年にわが町域に移転してきた来歴を書きました。

そして家康がもつとも心を許し、寵愛した一人の女性の帰依寺が主題のお寺であったことは、町にとつても大切な話としましたので、今回は彼女を主題にした「しよりん寺もの語り」といたします。

- 「沿革概要」は前号のあと、
- ・ 関が原の大勝と側室お勝の局―萬年山勝林寺
 - ・ 寺院諸法度体制下の勝林寺
 - ・ 英勝院、春日局と勝林寺
 - ・ 近世寺院に転換後の勝林寺

となつていきます。しかし、概要を書かれた方もむずかしかったのか、内容の時系列が読みとりにくいところがありますので、彼女の生涯と「しよりん

ん寺」という視点から沿革概要の流れにそつて書いてみます。

英勝院と勝林寺

英勝院は幼名を、おちちやおはちといいますが、天正六年(一五七六)房州湊で生れ、おはちといひ、江戸で育つたというのが正しいでしょう。

家康の側室となつてからは、お梶の方後にお勝の方と呼ばれました。大奥の図面上では於加知乃方とも書かれています。

感じとしては当時、「おかぢ」の呼び名が通用していたようです。

徳川幕府家譜では、他に勝れ御愛寵なりとあり、「家康の族葉」(中村孝也)中でも、数多き側室のうち異彩を放てる婦人と評されています。このことは、前号のはじめの私の人物像スケッチでもご理解いただけると思います。

次頁に、「英勝院の係累」を示しましたので以降の話の参考にして下さい。

この図については少し説明が必要です。図の左側、太田康資以後の英勝院側は、前期中村氏の家康の族葉によります。

右側の太田資綱がこの仕事で、重正とか重政と書かれています。重正と「本郷の寺院」にある浩妙寺の記録とあわせ作成し、浩妙寺のご住職浅野文徳様のお許しを得てここに公表しました。

私のこの仕事は、町内の宗派の異なるお寺の縁を取りもてたのは嬉しいことです。

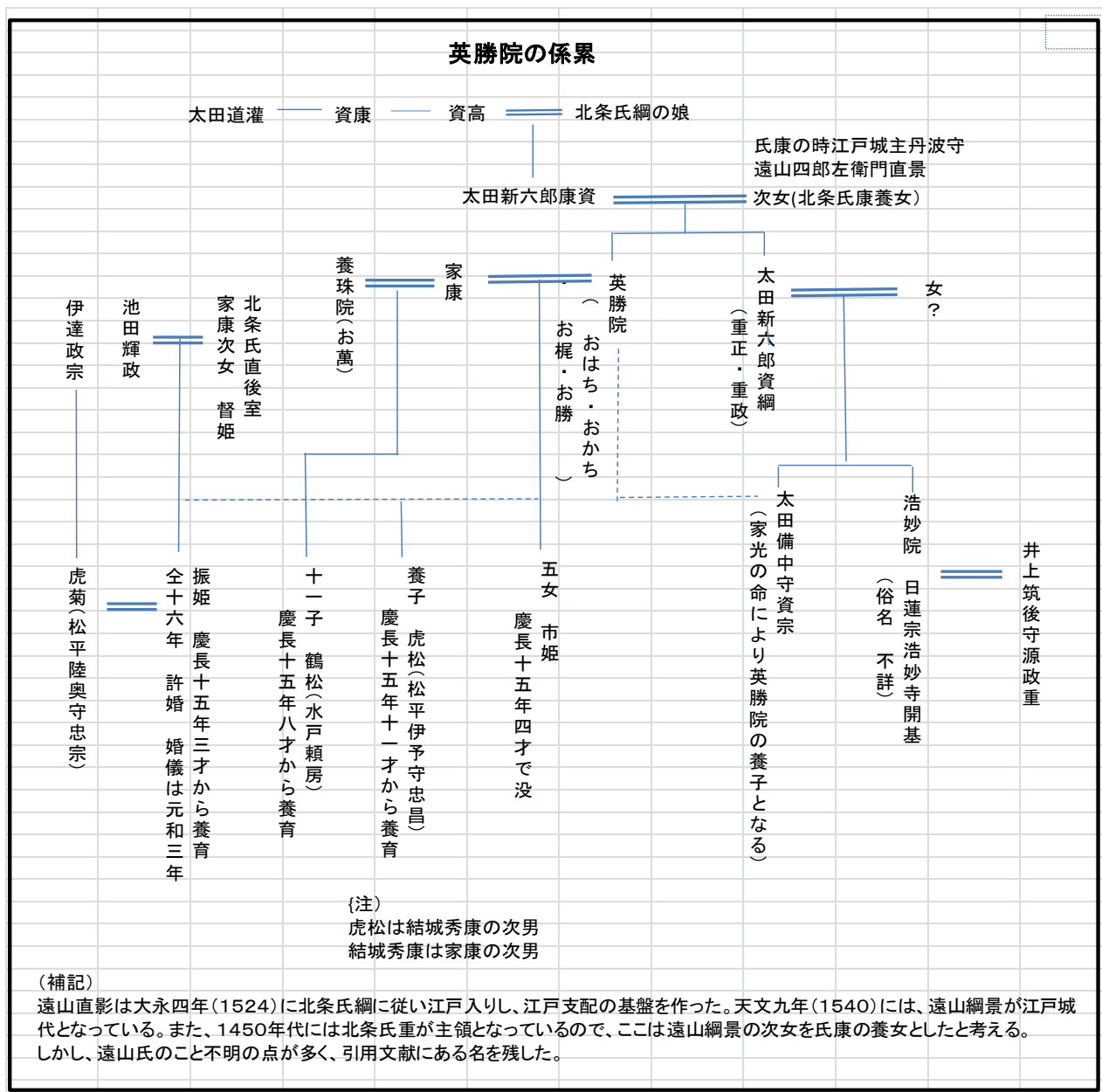
さて、天正十八年四月江戸城東の正林寺出丸泊船亭で保護された小女「おはち」十三才は、侍女として江戸城殿中に出仕するところとなつた。

おはちは名をお梶と改め、家康の寵を被り側室となるが、彼女のことは慶長五年(一六〇〇)二十三才の時、関が原の役で家康の共をした記録まで何もわからない。

この間の十年、家康も五十九才となり、秀吉から北条の旧領六カ国を与えられ、十一月には相模・武蔵の諸寺社に所領を寄進し、判明しているもの約三百寺社、他の諸国のものも数十寺社に上つていく。

各武将達への知行割りと合わせ、新しい領国の当座の安堵を図つた家康の政治的手腕と評価できるが、同時に秀吉の朝鮮出兵をひかえた彼自身の心の安堵のためにも必要なことであつた。

江戸入府直後の彼の正林寺支配の意途はこの流れの一コマと見た方が良さそうである。家康は文禄元年(一五九二)は肥前名護屋で越年し、翌年は江戸に帰つたが、一五九四年以降は伏見と江戸の往復が目立ち、ほとんど伏見で越年している。慶長三年(一五九八)には秀吉が没しているので多忙を極めたであろう。



江戸には慶長五年六月に帰った。そして、九月の関が原に共を命じた家康に、何か「おかち」の気性の赴くところに変化のあったことを感じる。

第八十二号の末尾に書いたような、父康資兄資綱の運命のなか、少女期を江戸城崇呼山正林寺出丸泊船亭で育った娘は、並の側室のような姫ではなかったから。

彼女は騎乗して関が原へお供し、中山道赤坂宿岡山の陣中で九月十五日東軍大勝の報を聞く。家康はこの勝利を記念し、岡山を勝山と改め、お梶を「お勝の局」と改名させ、お勝に帰依寺の故をもつて正林寺に「勝林寺」の寺号を与えた。

ここで当寺は以後、「萬年山勝林寺」と称するところとなった。慶長五年(一六〇〇)のことである。

慶長八年(一六〇三)家康は幕府を開き、翌年竹千代(家光)が生れ、お福(春日の局)が乳母となり、慶長十年に江戸城大改修(第一次天下普請)が始まり、秀忠に二代將軍の座を譲った家康は駿府に隠居するところとなり、お勝(二十八才)も駿府へ移る。

一才年下のお福との出会いは、二人にとっても徳川にとつても奇遇といふべきことでした。

お福は天正十九年(一五八一)十三才で、三条西家に奉公に上り、十七才で稲葉家に嫁

ぎ、夫正成が小早川家にあつたため、備前岡山城の重臣となつたが、二十五才の時故あつて離婚、京都で乳母募集の高札を見て応募したと云われている。慶長九年お福が乳母となつた同年に長男稲葉正勝は竹千代の小姓となつた。

同年輩のお福はお勝と境遇に相通じるところがあり、江戸城奥向きのことをお勝から色々と教わつたことでしょう。二人が共に江戸城で暮らしたのは足掛け二年でしたが、この頃家康の寵愛を一身にあつめていたお勝とお福の間には、肝胆相照らした女心が生れていたと思われます。

ここで「おかち」女盛りの逸話を少し乱暴な要約で書いておきます。

一つは、家康が本多・大久保などの腹心のものとの焼火話しのなかで、食物のうまものまじりもの談義を突然はじめた時、茶を入れていたおかちに武将達が話を振ってきた。おかちは笑いながら「塩と言ひ、塩梅如何でもの本味が出ると言つた。諸公が感心したのに家康が引かされて、国の運営・人物任用の枢機を説いて聞かせたという。話のはじまりはたわいのないものであつたが、この話の筆者は家康の体験的な境地を語らせた局を褒めたいと。

もう一つは、名だたる儉約家であつた家康に調子を合わせた儉約逸話で、垢のついた白い小袖を洗わされ指を痛める侍女を見兼ね

て新しいものを召されたらと言ふ話を聞き、侍女を集め、「われ常に天道を恐る。天道は第一に奢侈を悪むなり」と前おきして、自分の財は駿府の他在地に十分あり、毎日新しいものを着ていられる。こうして財を貯えるのは、時に当たつて天下の人へ施すか、後世に積み置いて国の用に立てようと考えているからで、平素から一衣も無駄にしないと説いたと云う。この筆者は、したり顔で儉約談義をし、賢女振りが目につくが、家康の寵愛が厚く、大奥における権勢の並々ならぬものが推し量られると書いている。

しかし、彼女は家康の側室として、分を越えることが無かつた。この権勢は評判と解されるし、この時は駿府在中である。

因に、元和二年（一六一六）家康が没した年の「久能山御蔵金銀請取帳」の「おかちさま御預かり」には、大判二百枚入八箱以下七点の金銀は莫大である。

さて、お勝（三十才）は慶長十二年（一六〇七）正月元日駿府で市姫（家康五女）を生み、もつとも幸せな時を過していった。

だが、同年勝林寺最大の加護者である松平忠吉が二十八才で亡くなり、家も無嗣断絶したことは寺にとつても彼女にとつても悲運のはじまりであつた。

市姫は同十五年二月四才で夭折する。悲嘆した彼女は菩提の志に思いついて剃髪することを願ひ出たが、六十六才になつた家康が

承知するはずがなかつた。

家康は虎松を駿府に召寄せお勝の養子とし、次いでお萬の子鶴松も養子とし、さらに三才の振姫と三人の子や孫の養育を命じた。

皆慶長十五年のことである（前掲係累を参照されたい）。

お勝の心にはこの時点で、家康の女から徳川家の女に変わった。養母としての慈愛は頼房と忠昌が叔甥の間柄ながら実の兄弟のように育つた。また、伊達政宗などの外様の大名たちも彼女に憧憬の念をもつていた様子が感じられる。

一方で、彼女は江戸を留守にしている間勝林寺のことをお福に頼んでいた。殊に幕府の宗教政策として、慶長十八年（一六一三）の勅許紫衣、諸寺入院の法度が出たことへの憂慮があつた。この法度は元和元年（一六一五）の禁中並公家諸法度、諸宗諸本山法度そして武家諸法度等幕府の運営の基本政策につながつてくる。

片方、お福は、慶長十九年大奥で竹千代と国松との相続問題などがあつて、国松次期將軍との流れに必死の対応に苦慮していた。家康は慶長十九年の大坂冬の陣・元和元年の夏の陣で、彼の時代作りに総力をあげていた。

お福は七月に諸法度の決定をみて、秋九月に伊勢参りと称して駿府に赴き、竹千代三代將軍を家康に直訴し、十月に家康江戸城で竹千代相続を決定する。

筆者はお福のこの時の行動と諸事タイムミン
グの取り方にお勝の存在を否定することが
できない。

このことは何も記録に残っていないが、後
の家光の言動とお福との間柄から推察でき
ます。

そして駿府に帰った家康は元和二年（一六
一六）四月七十五才で亡くなる。

家康の死去後お勝（三十九才）は直ちに髪
をおろし、「英勝院」と号し、翌元和三年江
戸に帰ると、お福を同道し、三つ谷の地に勝
林寺を訪れる。

彼女は釈迦如来坐像の前で、家康から関が
原戦勝のあと拝領したと思われる、陣中守護
神「三面大黒天」像を寺に寄贈し、時の住職
渭川周瀏和尚・寺方肝煎（世話人）と檀家諸
士に「向後、勝林寺は旗本諸大夫合刀し維持
にたように」と告げ、改めてお福に後事を託
して太田備中守下屋敷に身を寄せた。

この時の寺方は、徳川旗本典薬頭半井大和
守卜養を頭とする医師団、御殿医中川元享
（肝煎で当寺の財政方開基）、根来鉄砲隊与
力支配崎山宮内（肝煎で当寺実務方開基・初
代檀家総代）、松平周防守家中山田惣右衛
門で、津田平左衛門もその一人でした。

崎山宮内は、松平康重領内小松原城跡に建
つ東光寺の材を三つ谷に移転した指揮者で
した。

かくして、家康入府から二十六年の間、お
勝の局を擁し、松平忠吉を主柱と頼み、順風
に帆の勢でできた勝林寺は、鎌倉時代からつづ
いた禅僧の修行場・儒学の知識をもつ禅僧に
よる武士達の教養の場から、葬祭を行う一般
寺院へ移行するところとなった。

おかちは將軍の側室として浄土宗の身とな
ることの定めを心の帰依寺で告げた。

元和六年（一六二〇）竹千代元服、同九年
お福四十五才の時、家光三代將軍となり、お
福は代官町―現春日町あたり―に屋敷を給
わった時、英勝院も天樹院（千姫）と共に近
くに屋敷をもらった。

四十六才になったおかちこと英勝院は、来
し方を想い昵懇のお福と老後のことを、また
お福からは城中のこと聞かされていたこと
でしょう。

家光の命により英勝院お掛りであったお福
は、寛永元年（一六二四）麟祥院（天沢山）
の建立を発願する。当初の寺名は報恩山天沢
寺。彼女のそれまでの帰依宗は知らないが、
お勝との交流で臨済宗に身をおいたと考え
たい。寛永三年大奥総取締役「御年寄」とな
り、寛永六年（一六二九）紫衣事件処理に当
り、後水尾帝から「春日の局」の名を賜った。
天沢寺は当初甥の神奄和尚を住職としたが
病弱で寛永七年春日の局の特請を受け、渭川
和尚が正式の開山となる。

英勝院は渭川和尚のあと了堂宗歇和尚が住

職となったことは当然知っていたでしょう。
彼女は勝林寺の安泰をみて、寛永十三年（一
六三六）太田道灌の故地鎌倉邸跡扇ヶ谷に東
光山英勝寺（浄土宗尼寺）を創建し開基とな
り、養育した水戸頼房の娘清因果尼を開山に
請じて、共に住みました。

春日の局も当地を訪れて故事を語った由。
寺は代々水戸家息女が持住となった。

しかし、英勝院は寛永十八年病となり、心
の故地三つ谷にある勝林寺隣接の太田備中
守資宗の別邸で療養する。

家光は資宗に養子として看病に当り様子を
逐次報告するよう命じた。

翌十九年（一六四二）五月二十一日、家光
は前年八月に生れた赤子の四代將軍家綱を
伴って太田邸に見舞、わが子を対面させる。
家光は春日局より三代將軍継嗣の経緯を聞
いており、見舞は三度に及び彼女の医療への
配慮は金品に止まらず、その恩に報いる思い
は殊の他厚かった。

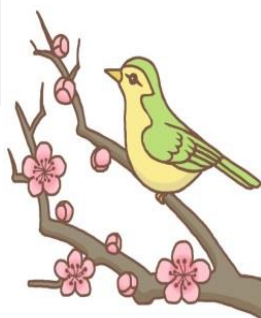
こうして、同十九年八月二十三日「おかじ」
は六十五才の多端な生涯を閉じた。

東光山英勝寺には頼房の子水戸光圀が立て
た墓碑銘文があり、彼女を後世に語りついで
彼女の法名は「長誉清春大禅定尼」で、江戸
瑞松寺に葬られた。

そして、後を追うように、渭川和尚と春日
局が翌年他界する。

勝林寺は英勝院の言葉通り、檀家の旗本、諸大夫の合力ですべてが行われることとなった。

後享保三年（一七七八）の江戸の大火で全焼の時は檀家旗本の合力で復興。明暦の振袖火事後の安永元年（一七七二）目黒行人坂の大火で全焼したときは、檀家旗本諸家から老中に出世した田沼意次が中興開基となつて、見事伽藍を完成、妙心寺別格相当の寺格を得るところとなった。



つづく

町会活動の概要

25年 6月から平成25年 11月まで

- 6/4 駒込警察振り込め詐欺キャンペーン
- 6/10 ふれあい給食会
- 6/12 駒込警察母の会総会
- 6/17 向丘地区連合宿泊研修会
- 6/24 日医大建替工事協議会
- 7/9 学校運営協議会

7/19 日赤献血運動

7/22 日医大建替工事協議会

7/23 根津神社つじ苑 草とり

7/25 区報配布・蓬萊町だより配布

7/29 日医大六号館解体工事説明会

8/19 日医大建替工事協議会

8/25 蓬萊町大観音盆踊り

9/2 敬老てんぷら会

9/5 秋の交通安全運動

9/5 駒込母の会 秋の交通安全運動

9/14 「敬老の日」蓬萊町内お祝い

9/21 駒本小学校 道徳授業公開講座

9/22 盆踊り鉢洗い反省会

9/28 「お寺のよう」運営協議会

9/30 日医大建替工事協議会

10/4 東京国際消防展 見学

10/13 青少年対策向丘地区バス旅行

10/15 防犯活動推進員研修会

10/18 景観対策防犯キャンペーン

10/27 駒本まつり

10/28 くすの木郷洗濯たたみ

11/1 駒込警察母の会研修会

11/4 防災コンクール

11/8 スクールガード研修会

11/11 文の京こどもまつり

11/15 振り込めサギ防止キャンペーン

11/20 リサイクル研修

11/25 消防65年記念大会

11/25 日医大建替工事協議会

蓬萊句壇

回転ドアくるりと秋を迎えけり 津久井たかを

浮かべたる月の重さに池へこむ 岡部恒田

新涼やピン一本で髪上げて 藤井明世

煮魚の眼に睨まれつ秋の酒 馬場珊花

客を待つ部屋に九月の風通す 森ゆかり

残る虫災地に人の住めぬまま 池田南北

訃報

坂巻六郎様 84歳 向丘2-15-18

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

訂正

会員名簿に欠落がありましたので追加訂正いたします。

中部5地区 西澤康夫様

向丘2-23-17 5685-1305

| 平成25年盆踊り決算報告 | | 盆踊り実行 | |
|--------------|------------|---------|------------|
| 収入 | | 支出 | |
| 費目 | 金額 | 費目 | 金額 |
| 協賛金（49名） | ¥531,600 | 運営・設営費 | ¥449,992 |
| 屋台・ゲーム売上 | ¥372,040 | 模擬店・設営費 | ¥329,544 |
| 町会盆踊り活動費 | ¥300,000 | 御礼 | ¥146,040 |
| 区助成金 | ¥134,516 | 雑費 | ¥76,501 |
| 鉢払い会費（31名） | ¥31,000 | 鉢払い経費 | ¥101,682 |
| | | 小計 | ¥1,103,759 |
| | | 残金 | ¥265,397 |
| 計 | ¥1,369,156 | | ¥1,369,156 |

残金は町会本会計に返却



多目的に使える追分ホール



格技室（剣道場にも変更できる）

六中の新校舎が完成

文京区立第六中学校の改築工事（第一期分）が完成し、11月末に見学会が開催されました。地上7階／地下一階建ての新校舎には、6つの教室の他にパソコン室、理科室、家庭科室、美術室、音楽室、格技室（地下1階）、プール（7階）、体育館、追分ホール（6階）等の部屋があります（上の2つの写真参照）。

思い出の詰まった古い校舎も捨てがたいものですが、時代にマッチした新しい校舎が完成し中学生諸君が存分に勉学やスポーツに励むことができますことでしょうか。

尚、近隣の住民の方々の一部の施設を貸し出すことも検討されているそうです。

編集後記

あけましておめでとございます。
 新年を迎えまた新しい気持ちで目標にチャレンジしていきたいものです。
 皆様のご健康とご多幸をお祈りいたします。

正月やうえんうえんと人見知り

編集委員

本城康至 坂本禎一
 大熊敏幸 猪熊良一